

室内画に表現される内的世界についての一考察

— 境界づけられていない空間イメージをめぐる —

山 森 路 子

A Study of the "Raum Test"

— On the "Raum" Image with No Boundary —

YAMAMORI Michiko

I は じ め に

我々は臨床場面で、著しい気分の落ち込みや不安を抱える人が家に閉じ籠もるように生活しているさまを聞き知ることがある。彼らにとって家はあたかも自らを守る砦となっているようである。あるいは、逆に、プレイセラピーの場面で、子どもがミニハウスやジャングルジムを基地にし、そこを拠点にのびのびと動き回る領域を拡げていったというような例を経験された方もおられよう。これらの例は、我々人間にとって安心して存在できる領域がいかに重要であるか、そしてそのような領域を持つことへの我々の志向性がいかに強力であるかを改めて考えさせるものである。

Bollnow, O. (1963) は、哲学の立場から、人間と空間 (Raum) の関係を考察することで、この問題に取り組んだ。彼は、空間について、中心や方向性を持たない等質な数学的空間と、我々が主観的に体験している「生きられている空間」(あるいは「体験されている空間」) の2側面を指摘し、人間存在と密接に関連しているのは、後者の側面であるとした。そのような意味で、Bollnow は、人間が空間の中に安心して身を置くことについて論じたのである。

Bollnow は、世界構造の神話を失った人間にとって、いかに空間の中に自らを位置づけ得るか——彼はこれを、「住まう wohnen」と表現している——を最大の課題であると考えた。彼によると、この「住まう」とことは、①空間のなかのある場所に根をおろし、②同時にそこを中心とする空間の分節化が生じ、③迫ってくる敵から身を守って居ること、を包含している。そして Bollnow は、この「住まう」ことが端的に具現化されたものとして家屋を位置付け、人間の自分の家屋への関係はその人の世界全体への関係を表す、と述べている。すなわち、ある人がいかに世界を体験しているかは、その人がいかに家屋に「住ま」えているかに反映されていると考えるのである。

確かに、先のような例から考えても、我々は知らず知らずのうちに、自らの世界に対する構えを家屋に持ち込んで生活しているようである。家屋が我々にとって持つこのような側面を踏まえ

るならば、個人が持っている家屋のイメージを探ることによって、その人の体験世界を理解する手掛かりが得られるのではないだろうか。

Ⅱ 家屋のイメージを探る試みと室内画

家屋のイメージを見る方法として第一に挙げられるのは家屋画、つまり家屋の外観の絵であろう。家屋画は従来HTP (house-tree-person) 描画法の一アイテムとして描かれてきたが、「家庭や家族に対する意識的ならびに無意識的態度が反映される」(Buck. J. N, 1948) との観点からの解釈が主流であった(井上, 1984)。これに対し、井上(1979)は、Bachelard. G. や Bollnow. O. の考察を踏まえ、「外界から安心して住まえる空間を切り取って保障するもの」という根本的な意味合いから家屋のイメージを捉え直した。そして描かれた家屋の境界面が外に対して、いかに開かれ(見透かされ)、いかに閉じられているかという点に着目して(表1)、個人の世界における存在様式を理解しようとしたのである。これは、例えば、戸や窓を欠く過度に閉鎖的な家屋に外界に対する警戒心の強さを読み取ったり、戸や窓が壊れているような過度に開放的な家屋に外界の刺激から自らを守り得ない無防備さを読み取っていくというものである。「開かれー閉じられ」のいずれかの極を良しとするのではなく、「安心して住まえる空間」を維持しつついかに外界に対してほどよく開かれているか、が問題になっていると言えよう。

一方、徳田(1982)は、井上の研究を踏まえつつ、「家は内部空間があって初めて家たり得るのであり、いかに強固な壁に守られていても内部が居心地よくしつらえていなければ“安らぎの空間”(Bollnow)としての意味は持たない」との観点から室内画(“Raum Test”)を考案した。これは、従来の家屋画のあと、別の用紙に、その家の中にある部屋を描かせるもので(図1)、家屋のイメージを内側から探ろうとするものである。そして、井上が設定した家屋画の分析指標を参考に〈開ー閉〉の2軸からなる分析指標を作成し(表2)、これを従来の家屋画と組み合わせ

表1 井上(1979)による家屋画の分析指標

開 指 標	閉 指 標
1 扉あり	1 扉なし
2 扉が家の右側面	2 窓なし
3 扉開放	3 ある階に窓のない家
4 窓あり	4 窓に「十字」以上のサン
5 窓開放	5 窓に格子・カギ
6 扉や窓を欠いた開口部	6 カーテンあり
7 縁側・ベランダ・テラス	7 カーテン閉まる
8 煙突から煙が出る	8 雨戸あり
9 家の中を描き込む	9 雨戸閉まる
10 開口部面積1/2以上	10 壁の強調
11 道	11 開口部面積1/6以下
12 透明	12 囲い・塀
13 破損・崩壊	13 門閉まる
14 正面以外右側面のみ(右近景)	14 植え込み

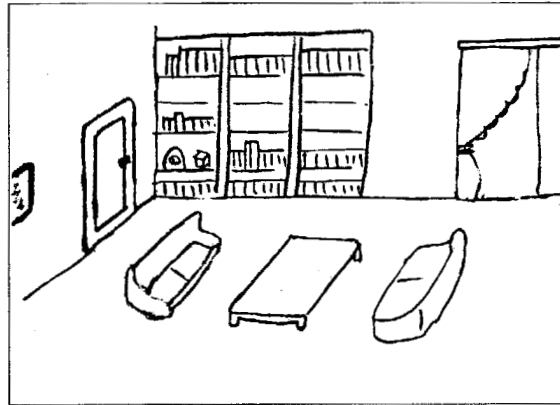


図1 室内画の一例¹⁾

表2 徳田（1982）による室内画の分析指標

開 指 標	閉 指 標
1 開口部あり	1 開口部なし
2 二面以上の開口部	2 三面の壁
3 開口部開放	3 窓に「十字」以上のサン
4 部屋の外が見える	4 窓に格子・カギ
5 境界線欠如	5 カーテンあり
6 壁除去	6 カーテン閉まる

せて、Anorexia Nervosa 群およびその対照群としての青年期男女に実施した。彼はその結果、男性では家屋画で〈開〉に、室内画で〈閉〉に傾くのに対し、女性では逆に家屋画で〈閉〉に、室内画で〈開〉に傾くこと等を見出し、室内画の「開かれ－閉じられ」ている在りように、家屋画の場合とは異なる存在様式の側面が反映される可能性を示した。

この、家屋画と室内画とで見られた「開かれ－閉じられ」の在りようの相違は示唆的と思われる。Bollnow は、空間がその人の心理状態を反映することを指摘した。すなわち、「(空間は) その中でふるまっている人間とともに変化し、また自己の全体を支配している特定の観点や精神的態度の現状とともに変化する」のである。Bollnow は空間論を、人間の空間への「内的関係」「内的構え」として論じているので、これは結局のところ我々の中にある空間イメージの問題を扱っていると考えられる。すなわち、我々の空間イメージは我々の心理状態を反映すると考えられるのである。このような観点から見ると、室内画は、まさに個人を取り巻く空間のイメージの表現と見ることができ、空間がその人の心理状態を反映するという性質を巧みに生かした技法であると言える。室内画が個人を取り巻く空間イメージを表わしているとなると、家屋画は、それを一步外側の視点から捉えたものであると考えられる。例えば、井上（1984）によると、分裂病者では、覗き穴のような小さな窓しか持たぬ家屋画がしばしば見られるという。これらについて井上が「家の中に身を潜め、いつ何時接近してくるや知れぬ脅威的なものに対して身構え、目

を凝らしているかのよう」と考察しているように、描画者自身の脅威にさらされやすい心性ゆえにそのようなガードの固い家屋が求められるのだと解される。このような例から考えると、家屋画は、(室内画のような空間イメージに生きる)個人がいかんして外界と関わっているか、という側面と関連深いものとして位置づけられるように思われる。また、室内画は、描画者の心理的な意味での生活空間の様相を家屋画よりも一層直接的に反映しうるという点に、その有効性をもつものと考えられる。

Ⅲ 室内画を用いた一研究

以上のような考察から、筆者は室内画を個人の体験世界を理解する有効な手掛かりになると考え、心身症者に関する研究の中で描画課題として実施したことがある。対象は、心身症者21名と、対照群としての成人男女146名であった。そこで得られた性差や心身症者に見られた特徴については、統計的な観点から他のところで報告したことがある(1997, 山森)。本論では、そのような指標による評定では捉えきれなかった特徴的な描画に焦点を当て、それらに表現される内的世界について考えてみたい。

① 境界線欠如という現象の意味

評定上の困難が見い出された第一の例は、図2のようなものである。これは、床と壁、壁と壁の境界線が描かれておらず、徳田が境界線欠如と呼んだ現象(図3)に属する。指標としての〈境界線欠如〉は、徳田が家屋画に準じて室内画の指標を設定した時点ではなかったもので、実際の調査の中で見られた現象から、彼が新たに追加したものである。またこれは、Anorexia Nervosa 群に特徴的に見られた項目でもあるという。筆者の研究(前出)でも、心身症群の66%、対照群の19%がこの項目に評定され、有意な群差が見られている。

〈境界線欠如〉について徳田は、「境界線が欠如すれば家の家として成り立たず、……まさに内部空間と外部空間の boundary に関わるものと考え、開指標として取り上げた」としている。しかし、この解釈を図2のような例にあてはめるとき、図3では表面化しなかった問題が浮き彫りになる。すなわち、図2のような場合、開指標の〈境界線欠如〉と同時に、閉指標の〈開口部なし〉にも評定することができ、一つの状態を同時に反対の意味で評定することが起こってしまうのである。壁によって限界づけられていない空間は、一体開いているのか、閉じているのか。〈境界線欠如〉を開指標として位置づけることは果たして妥当なのだろうか。

ここで改めて気づかされるのは、〈開-閉〉を軸として内部と外部の関係性を評定する徳田の指標は、あくまでも内部と外部の区別が成立していることを前提としているということである。これに対して、この〈境界線欠如〉だけは、まさに内部と外部の区分づけに関わるものとなっている。それゆえ、境界線欠如の現象は、内部と外部の関係が〈開〉であることを表していると捉えられるべきではなく、むしろ、そもそも内部と外部が未分化で、内部と外部の関係が問題にならない状態を表すものと考えられるのである。

境界線欠如のような空間描写は、境界づけられ庇護されているという感覚の希薄な、茫漠と広がる世界を想像させる。そしてこのことは、描画者の境界イメージの希薄さと関連があると推測

される。徳田が境界線欠如の描画に、Anorexia Nervosa にしばしば指摘される「自己の曖昧さ、不確かさ」を読み取っているように、彼女らの心理的な意味での生活空間はまさにこのような茫漠とした世界なのかも知れない。

② 境界線欠如の描画に開口部が描かれることの意味

境界線欠如を内部と外部が未分化な状態と捉えるならば、図3のような境界線欠如の場合に描かれた開口部はどのように位置づけられるのだろうか。

それは、第一に、図2のような「全て内部空間」とも「全て外部空間」とも言える単一構造の世界に、内部と外部、こちら側と向こう側、という二重構造をもたらす区分づけの意味を持つものと考えられる。すなわち、境界線欠如の場合に描かれた開口部には、内部と外部の繋ぎ目という通常の意味のみならず、まずそれ自体に内部と外部の境界設定の働きを読み取ることが必要と考えられるのである。開口部に境界としての意味を見ろというのは、開口部が本来壁の一部を成すものであることから考えても自然な解釈であろう。ただし壁の描写としての不完全さを加味すると、開口部は壁の描写の萌芽、境界イメージの萌芽のようなものではないかと思われる。この

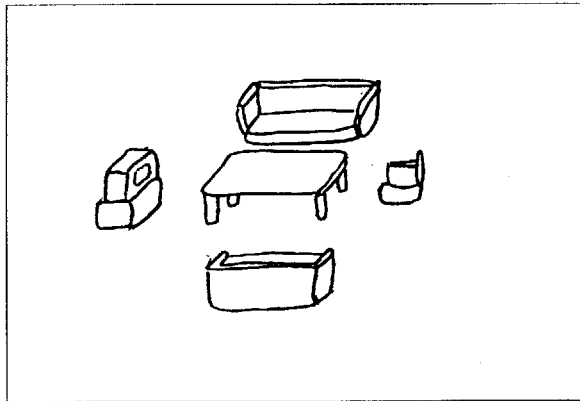


図2

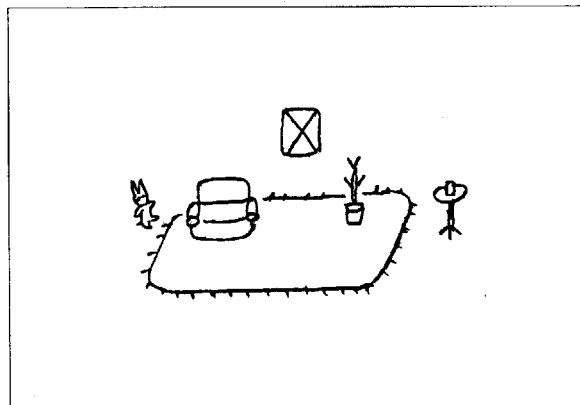


図3

ように、境界線欠如の場合に描かれた開口部の第一の意味は、境界設定機能にあるものと考えられる。

ここでもう一つ注目しておきたいのは、最初の境界を表すものとしてほかならぬ開口部というアイテムが用いられている点である。茫漠とした世界に現われた開口部は、こちらの世界を限界づけると同時に、その向こうに別の世界があることを我々に知らしめ、我々を向こうの世界へと繋いでいる。すなわち、開口部というアイテムによって、我々はこちらの世界に限界づけられるのみならず、向こうの世界とも繋がっているのである。この、向こうの世界と“繋ぐ”ということこそを、ここでの開口部がもつ第二の意味として指摘できるように思われる。

では、このような、限界づけられながらも向こうの世界と繋がっているという図3のイメージは、どのように理解できるのだろうか。このようなイメージで表現される内的世界とはいかなるものなのだろうか。

このイメージを理解する手掛かりとして、いま一度 Bollnow の空間論を引くことにする。Bollnow は彼の空間論の最終章で、人間の空間への関わりを4つの様相に整理することにより、「住まう」という概念の一層の明確化を計っている。4つの様相は、発達の的に展開し、また生活の中でも層を成して保持されているものとされ、以下のようにまとめられる。

1. 空間への素朴な全面的信頼、すなわち子供のような無邪気な安らかさ。自我と世界の対立を含まない、空間と溶け合った状態。
2. (対象的に物を捉える意識が形成され) 空間の敵意が経験される。
3. 家屋を建設し、外部空間から庇護された内部空間を確保する。この段階では、脅迫的な空間は消滅したのではなく、ただ中心から排除されて端へ追いやられた状態。家屋を外面的な仕方で(形式的に)所有することと同義。
4. 堅固な容器の中でおじけづいて硬直化してしまうことを乗り越え、家屋に住まいながらも空間全体(世界全体)に対するより大きな信頼を獲得し、空間全体の中にしっかりと埋め込まれている状態。「境界によってこの媒体(空間)の他の部分から分離されてはいるが、なおその境界をこえてこの媒体と結びついている」(括弧内筆者)状態。これは、人間が本当の意味で家屋に「住まう」とことと同義でもある。

ここに示されるように、Bollnow は、本当の意味で家屋に「住まう」ことを、単に外面的な仕方で家屋を所有することと区別しており、家屋に「受肉する」とも言い換えている。先に述べたように、これは我々の中にある空間イメージの問題と考えられるので、Bollnow のいう「住まう」とことは、家屋に象徴されるような境界づけられ守られた空間のイメージをいかに内在化できるか、がポイントになっていると解される。そして、Bollnow を踏まえるならば、もう一つのポイントは、このような内在化と同時に空間全体(世界全体)と結びついているという感覚が獲得されることである。

このような空間論に照らしながら図2、図3を見ると、両者の違いがよりはっきりと浮かび上がるように思われる。すなわち、図3では一部なりとも境界づけられ、また他と繋がっているというイメージが表れており、Bollnow のいう「住まう」という空間イメージが窺われる。これに対し、図2では境界づけられている感じが薄いのみならず、どことも繋がっておらず自分と世界との関係が確認できない全くの孤独な世界であることが感じられるのである。このような描画

表現をとったものではないが、北山（1993）は、「壁」という言葉を用いて自らの状態を巧みに表現した女性の事例を報告している。この患者は、「隣家の人が自分の悪口を言っているのが壁を通して聞こえる」「自分を守ってくれる壁がない」という当てにならない壁イメージの一方で、「先生との間に壁がある」と表現されるような感覚にも悩まされていた。そして、このような筒抜けの壁か遠く隔てるだけの壁でなく、彼女の体を守る壁や内側のものを外に漏らさない壁をつくっていかうとする治療過程の中で、彼女は「少しずつ世界がひらけていく」と表現するようになっていく。この「少しずつ世界がひらけていく」という表現から、それ以前の彼女の体験世界が、（守られず晒されたものであったと同時に）周囲と繋がっていない疎隔されたものであったことが窺われる。この、筒抜けの壁と遠く隔てる壁で表現される世界とは、まさに図2のようなイメージではなからうか。もう少し言うならば、図2とは、この女性患者のような、守られずまた周囲と疎隔された心性と親和性のあるイメージではないかと筆者は推測するのである。また、図3は、開口部に表現されるように、一步境界づけられると同時に、一步「世界がひらけていく」イメージと言えよう。このような観点から見ると、図2と図3はいずれも境界線欠如の現象に属するとは言え、そこに反映される心性には、両者の間に重要な転換点が含まれている可能性があるように思われる。

以上、開口部の意味づけを通して、そこから推測される内的世界について考察してみた。これらは、あくまでも、室内画を読み取る一つの視点であり、一試論であり、また今後の研究を通して吟味修正されていくべきものであらうと思われる。

IV お わ り に

本論では、特徴的な室内画を紹介し、そこに表現される内的世界について考察してきた。そこでは、「境界（限界）づけ」ることと「（他と）繋ぐ」ことが表裏一体となって、重要なキーワードとなっていたように感じられる。このことに関して、若干の考察を付け加えて、本稿の終わりとしたい。

従来、境界というもののイメージとしては、文字通り、その「境界づけ」る機能が第一義的に重視されていたように思われる。自我境界概念は、この問題に関して我々に最も馴染み深い用語であるが、この概念を明確化した Federn, P. (1953) は、自我の全一性を保証するものとして自我境界を考えていた。後に、Fisher, S. & Cleaveland, S. E. (1968) が、自我境界の「防壁性-浸透性」という2側面を提唱したが、これは、どんな境界を有しているかという、いわば境界の質的側面を問題にしたものであると言える。家屋画の研究を行った井上（1979, 1984）、室内画を考案した徳田が用いた（境界面の）「開かれ-閉じられ」（「閉じられ-開かれ」）という視点も、彼ら自身 Fisher らの「防壁性-浸透性」に対応すると指摘している通り、やはり境界の質的側面に関するものであると言える。これらが既に存在する境界を問題にするものであることは、この「開かれ-閉じられ」という視点では境界線欠如の描画を位置づけ得なかったことで、明らかになったと思われる。

この「開かれ-閉じられ」に代わって、本論では、「境界づけ」ること——「（他と）繋ぐ」

こと」が一セットとなって繰り返し用いられることとなった。この対表現が導き出されたのは、主に次の三つの事柄からである。一つ目は、描画上のアイテムからである。すなわち、紙面の中の空間を境界づけている開口部が、同時に、その向こうの空間を繋ぐ意味を担っていることを指摘した。二つ目は、境界づけられた家屋の中に居ながらして世界全体と結びついていることの重要さを指摘した Bollnow の空間論の中から導き出された。三つ目は、北山の事例の中から、生きた人間の心の動きとして、“境界づけ”られる感覚と“(他と)繋”がっている感覚が密接に絡み合っているさまを指摘した。ここで、“境界づけ”ることと“(他と)繋”ぐことが表裏一体となった境界イメージの在り方が、単なる描画上、理論上の解釈ではなく、我々自身の心の中にも認められる感覚でもあるということは、重要なことと思われる。この“境界づけ”ることと“(他と)繋”ぐという表裏一体の在り方に、我々は境界イメージの本質の一端を見ることができのではないだろうか。

精神分析学者の Tustin, F. (1987) は、境界意識の発達を論じる中で、同様の見解を提出している。これは、彼女が、自閉症児たちの治療に長年携わった経験から提出したものである。多くの事例の中から読み取られた境界イメージの問題として読むことができるであろう。Tustin によると、乳児は母親の“器 container (Bion)”に受けとめられる中で、自分がまとまりのある存在であることを感じるようになり、やがては皮膚で閉じられ外界とは分離された存在であることに気づいていく。そして、この皮膚(境界)を持っているという感覚は、自他(“me”と“not-me”)の分化を進める意義を持つと同時に、この皮膚(境界)を持っているという感覚こそが、それ以前の“境界のない”“孤立”からの脱出を可能にするものだという。すなわち、境界は、本来個人を孤立に追いやるものとしてではなく、外界との繋ぎ目として現れる。我々は境界づけられることによって初めて、他と繋がっているという感覚を持ち得るのである。

境界が、本来、“境界づけ”る機能と“(他と)繋”ぐ機能を同時的に担うものであることは、このように最初の境界イメージにおいて最も端的に浮かび上がるが、境界の持つ二機能のうち、特に“(他と)繋”ぐ機能の方は、普段はあまり意識化されることがないように思われる。しかし、臨床場面では、境界の機能のこのような対義性は、相手がいかに境界づけられまた世界と繋がっているか(あるいは、いかに境界づけられている感覚を持ちにくく、また世界との繋がりを見い出せずにいるか)を理解したり、治療構造の枠が相手にとってがいかなる意味を持ち得るかを考えるうえでの、一助となり得るのではないかとと思われる。

註

- 1) 図1は「床+二面の壁」の例であるが、このほか、「床+正面の壁」「床+三面の壁」のタイプを合わせると、壁で囲まれた部屋を描いたのは、筆者の研究(1997, 山森)では対照群の約8割に相当した。なお、本論に掲載している室内画(図1, 2, 3)は、いずれも筆者が実物の雰囲気が伝わる程度に模写したものである。描かれている家具自体は、いずれも室内画としては一般的なものである。

引用文献

- Bollnow, O. F. (1963) *Mensch und Raum* (大塚恵一他訳 (1978) 人間と空間 せりか書房)
- Federn, P. (1953) *Ego Psychology and the Psychosis* Imago Publishing London
- Fisher, S. & Cleaveland, S. E. (1968) *Body image and personality* Dover Public Inc New York
- 井上 亮 (1979) 家屋画二面法による boundary 概念の検討 — 精神分裂病者を対象として —
日本教育心理学会第21回大会発表論文集
- 井上 亮 (1984) 風景構成法と家屋画二面法 — 精神分裂病者の“棲まい”方からみた“風景”試論
— (山中康裕編「中井久夫著作集別巻 H・NAKAI 風景構成法」岩崎学術出版社)
- 北山 修 (1993) 両義的な言葉の橋渡し機能について (北山修著作集「言葉の橋渡し機能およびその壁」
岩崎学術出版社)
- 徳田完二 (1981) *Anorexia Nervosa* に関する一研究 — 描画テストを用いて — 京都大学大学院
修士論文
- Tustin, F. (1987) *Autistic Barriers in Neurotic Patients* London: Karnac Books
- 山森路子 (1997) 心身症者の人格構造に関する一研究 — 質問紙と描画による boundary の検討から
— 京都大学大学院修士論文

(博士後期課程2回生, 教育臨床心理学講座)